

【お香と植物②】

多彩な効用がある丁子

日本では古くからお香を焚く文化があります。お香は仏教の伝来とともに日本に入ってきたとされ、原料には中国や東南アジアなどで採れる植物が使われます。絶滅危惧種に指定されているような希少な香料もあれば、簡単に手に入るものもあります。

前回ご紹介した「桂皮（けいひ）」、そして今回お話しする「丁子（ちょうじ）」は、どちらもスーパーで入手できる身近な香料です。

丁子は、フトモモ科の常緑樹の花蕾を乾燥させたものです。漢字の「丁」には釘という意味がありますが、丁子は釘の形に似ているので、この名前が付けました。辛さ、酸っぱさ、甘さを含んだ刺激的な香りで、料理のスパイスとしても使われます。スパイスの場合は「クローブ」と呼ばれています。

丁子はお香やスパイスだけでなく、漢方、お清め、染料としても活用されてきました。漢方の世界では、歯痛や胃痛、風邪予防などに効果があるとされます。また、鎮痛、殺菌、抗炎症作用があるため、歯科の局所麻酔に使われることもあったそうです。私も丁子を一粒噛んでみたことがあります。確かに口の中がじーンと痺れて麻痺したようになりました。どんな感じが気になる人は、スーパーでクローブを購入して試してみてください。なお中世ヨーロッパでは、丁子にはペストを予防する効果があると信じられていた模様です。

そして、丁子にはオイゲノールという成分が含まれています。オイゲノールは防虫効果があり、ゴキブリもこの香りが嫌いです。ですので、ゴキブリ対策に丁子を使ってみるのも良いでしょう。（ただし、オイゲノールは水生生物や犬猫などが摂取すると問題が生じる場合があるので、ペットがいる場合は虫除けでの丁子使用は避けましょう）。



(Inoura)

秋の句

球を蹴る部活ばつたを追ふ部活

素振りにも聞こえつくつくぼふしかな

網かけてバケツ二つの稲穂かな

構内へ笛の誘導天高し

桐一葉なりと篁仰ぎけり

(MaeKita)

9月下旬、三年生は東北見学旅行に行きました。2011年の東北地方太平洋沖地震^(注)のあとに発生した大津波で多くの児童と教職員が亡くなった大川小学校を訪ねました。震度6強の揺れの後、全員が校庭に避難できたそうです。ところが、その後の大津波で多くの児童と教職員が亡くなってしまいました。それはなぜか、そこで何が起きていたのだろうか、そのことを巡り後に何があったのか、語り部の方々によって、大川小学校の校庭で、あるいはその裏山の高台で、本当に貴重なお話をいただきました。三年生はその話を理解しようと真剣に聴いていたことは言うまでもありません。(注：地震名「東北地方太平洋沖地震」、災害名「東日本大震災」)

あの地震の後、東北地方の太平洋側の沿岸のすべての範囲に津波警報、さらに大津波警報が発令されました。そのとき私も志木高にいてテレビでその映像を見ていました。三陸地方では古くから、津波が来たら、いち早く各自でてんでんばらばらに高いところへ逃げろ、という言い伝えがあり「津波てんでんこ」といいます。私もいつ聞いたのか忘れましたが、少なくとも2011年より前にはそのことを知っていました。実際、テレビを見ているとたくさんの人が高台に避難していて、まだの人に向かって「早く、早く！」と叫んでいました。

一年生の皆さんは5月に城ヶ島に行きましたね。現地研修前夜の講義で私は「もし大きな地震があったら、まずは身の安全を守って、次はとにかくバラバラでいいから高いところに逃げなさい」と言いました。これはまさに「津波てんでんこ」の精神からきています。

<津波のしくみ>

海の波の発生には大きく2タイプあり、風が吹いて海の表面付近だけにできる波と、海底の隆起や沈降で生じ海水全体が揺れる波があります。津波は後者のタイプです。このタイプの波の伝搬速度 v は、その場所の水深 h と重力加速度 g の積の平方根で表せます。すなわち、

$$v = \sqrt{gh}$$

重力加速度 g が出てくるのは、海の波は重力を復元力とする水の運動だからです。

さて、震源は三陸沖の宮城県牡鹿半島の東南東130km付近、深さ約24km、この場所はいわゆるプレート境界で、最近の調査ではこのあたりの水深3200m～5350m付近で亀裂が見つかっています。そこで仮に、津波の発生時の水深 $h = 4000\text{m}$ とすると、津波の速さは、

$$v = \sqrt{gh} = \sqrt{9.8 \times 4000} \approx 198\text{m/s}$$

となります。秒速200メートルは、時速720キロメートルです。沖での津波はジェット機並みの速さで進みます。

ところが、沿岸に近づき水深が浅くなってくるとどうでしょう。例えば、沿岸の水深100m付近での津波の速さは、

$$v = \sqrt{gh} = \sqrt{9.8 \times 100} \approx 31.3\text{m/s}$$

となり、かなり遅くなります。前を進む波が遅くなるということは、沿岸に迫る津波は渋滞を引き起こすということです。自動車なら止まれば良いですが水ではそうはいきません。次々に後ろからやってくる海水は上へ上へと重なっていきます。さらに悪いことに、三陸地方は入り江が発達するリアス式海岸です。高くなった津波の幅がどんどん狭まるため、その地形によってさらに上に盛り上がります。大川小学校に近い宮城県石巻市鮎川の気象庁の検潮所では7.6m以上の津波を観測、近くの女川漁港で14.8mの津波痕跡が確認されています。また、岩手県では40mの津波痕跡もあり、想像を絶する津波だったことがわかります。

大川小学校は北上川の河口にあたり、津波が川を遡上しました。現地に行ってみてわかりましたが高台に上っても目の前には海が見えませんでした。津波は川に沿って両岸を飲み込みながら進み、狭まった地形の中で渦をつくりすべてを破壊したそうです。

亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

(Higuchi)

この秋、根津美術館で空前絶後の展覧会が開かれる。今年4月、とある美術館の展覧会場で板倉聖哲先生から聞いた話である。板倉先生は中国絵画史の研究者で東京大学東洋文化研究所教授、根津美術館の理事も務める。後世「古典」と見なされた中国絵画史の一つの頂点、北宋時代（960-1127）の絵画がこれだけ東京に集まる機会は、自分が生きている間にはもうないだろう、というのである。

展覧会のタイトルは「北宋書画精華」、会期は11月3日から12月3日までのわずか1ヶ月である。きっかけは2018年、北宋を代表する文人画家・李公麟（1049? - 1106）の現存唯一の真筆とも言われる《五馬図巻》が約80年ぶりに出現したこと。描かれるのは5組の馬とそれを牽く人物。馬の名は鳳頭驄・錦膊驄・好頭赤・照夜白・満川花。いずれも実在の馬で、例えば鳳頭驄は、1087年に于闐国（西域）から献じられた馬である。この絵は、かつて南宋の高宗（在位1127-62）、清の乾隆帝（在位1735-95）が所蔵、1928年には東京で展覧会に出陳されたが、その後行方不明になり、モノクロの図版でしか見ることのできない幻の名画だった。今は東京国立博物館の所蔵になり、2019年以降、すでに何度か公開されているが、これと並んで今回の展覧会では、ニューヨークのメトロポリタン美術館から李公麟筆と伝わる《孝経図巻》が特別に出品される。水墨山水画の名品、董源筆と伝わる《寒林重汀図》（兵庫・黒川古文化研究所、重要文化財）や燕文貴筆《江山楼觀図巻》（大阪市立美術館）、仏教絵画の《孔雀明王像》（京都・仁和寺、国宝）など、国内に伝わる様々なジャンルの北宋絵画も集結する。

中国絵画史の研究では、真筆が一つも残らない画家についても、文献史料と模本から研究が進められる。作品を創り出す個人が高く評価されて模本が多く作られ、文献も多く残るからこそできることだ。先にその名を挙げた董源は、五代十国の一つ、南唐（937-975）に仕え、日本にも大きな影響を与えた江南地方の山水画の祖とされる重要な画家だが、真筆は一つも現存せず、《寒林重汀図》がその作風を最もよく伝える模本と考えられている。真筆が残らないのになぜそう言えるのか、展覧会場で実物をよく見て考えてみてほしい。



きつと伝説になる

特別展 Special Exhibition

北宋書畫精華

Masterpieces of
Northern Song Painting and Calligraphy

2023年
11月3日(金・祝)~12月3日(日) 根津美術館 NEZU MUSEUM

【開演時間】午前10時～午後5時（入場は午後8時30分まで）【休演日】毎週日曜日
 【入場料】学生1800円 学生以下 1500円
 ※開演者手帳のみ並見及び同行者1名は3800円、中学生以下は無料。
 スムーズなご入場と快適なご観覧のために、ご予約は当館ホームページから、
<https://www.nezu-museum.jp> お問い合わせ 電話 03-3400-2536

糧食與耕種



李公麟も北宋を代表する文人画家でありながら、誰しもが真筆と認めるのは《五馬図巻》だけ（ただし、うち1頭は別人による後補。乾隆帝がすでに見破っている）。《孝経図巻》がどうなのかは、これも展覧会場で見比べて確かめてほしい。ちなみに「文人画」とは、儒教や詩文の教養を備えた知識人＝文人が、余技として描いた絵画のこと。技巧より精神性を重んじる中国では、職業画家の絵よりも高く評価された。李公麟も科挙に合格した官僚だった。「余技」とは言うものの、その技術がきわめて高かったことが、実物を見るとよく分かるはずだ。

展覧会の醍醐味は、実物同士を見比べられること。今回の展覧会に集まるのは、（おそらく）個々の作品はさんざん見ているはずの中国絵画史の第一人者が見比べたかった作品たちである。チラシの「きっと伝説になる」という謳い文句は、往年のテレビゲームのようだが、本当に伝説になる展覧会かも知れない。

(Hara)

薬草としてのヒガンバナ

今年のヒガンバナは開花が少ない。確認できたのは柔剣道場裏，食堂の東側のみで，他地域はこれからのようである。今年は長雨や残暑のせいか，開花期がずれてしまった植物が多い。さて，ヒガンバナだが，その根（正しくは鱗茎）に薬用成分を含む。その実体は多種多様なアルカロイドであり，鎮痛，降圧，催吐，去痰をはじめさまざまな薬理効果がある。含まれるアルカロイドの1種，リコリンは市販のアメーバ赤痢の薬であるヒドロコリンの製材原料に用いられる。鱗茎をすりつぶして糊状にしたものを襖の下張りなどに使い，虫除けとすることもある【出典：原色牧野和漢薬草大図鑑（北隆館）】。

[2023年7月～2023年10月までの開花情報]

Grass

17. Jul.2023

キツネノマゴ，カラスウリ，ミョウガ，ツユクサ，ヤブミョウガ

11. Aug.2023

タケニグサ

23. Aug.2023

エノキグサ，ムクゲ，ヒメムカシヨモギ，ヒナタイノコヅチ

18. Sep.2023

チヂミザサ，ヤブマオ，ヤブラン，ヒナタイノコヅチ，ツルボ，ノビル，ママコノシリヌグイ，ヒメヨモギ，シロザ，ヒメムカシヨモギ，ヒヨドリジョウゴ，タマスダレ（初見）

1. Oct.2023

ヒガンバナ（白），チカラシバ，シロバナセンダングサ，チカラシバ，ヒメジソ，アメリカセンダングサ，カナムグラ



【ヒガンバナ】
ヒガンバナ科ヒガンバナ属

Wood

【9/18】ヤマハギ

【7/27】クサギ

(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	風習・文化	井之浦 茉里 (Inoura)
	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	歴史・美術	原 浩史 (Hara)
	俳句	前北 馨 (Maekita)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	編集・植物画	荒巻 知子 (Aramaki)